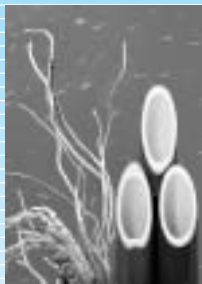


～きらめく加西人～

新春対談

環境省 水・大気環境局長 竹本和彦さん 聞き手：中川市長

希望に輝く、平成19年の新春を迎えました。市制施行40周年の記念すべき年、その幕開けにふさわしく、加西市出身で世界的にもご活躍されている竹本和彦さんと中川市長に対談していただきました。



市長 竹本先輩とは、ボーイスカウトの頃からのつきあいですから、40年近く、いろいろとご指導をいただいております。竹本さんが高校を卒業されてから、現在に至るまでのご経歴をお聞かせください。

竹本 昭和45年、北条高校を卒業し、初めて東京に来て、慣れない中、一生懸命大学生活を過ごしました。東京大学では、都市工学を専攻し、卒業と同時に環境庁（環境省の前身）に自分の専門を生かしたいと入庁しました。

それ以来、環境問題を担当していますがその中でも幸運だったのは、海外での仕事に恵まれ、1989年、米国ワシントンに本部がある世界銀行で、環境の専門家として中国とかアジア諸国の環境問題を担当しました。当時ブラジルで環境と開発をテーマとしてリオサミットが開催されるなど世界が大きく動いた時期でもありました。

その後、環境庁に戻り、もっぱら地球環境問題とか途上国の支援など、国際的な仕事をしてきました。現在は水・大気環境局長として、大気汚染防止、水質汚濁防止、土壌汚染など身近な環境問題に取り組んでいます。ちょっと異例ですが、環境大臣の特命を受けて地球環境の仕事も一部カバーしています。

象徴的な出来事は、1997年、京都でCOP3という温暖化対策の会議があり、京都議定書が採択されました。その時に議長をされたのが当時の環境庁長官の大木大臣ですが、私はその補佐役として参画できたことですね。

市長 そういう先輩が、環境の最先端分野で世界的に活躍されているというのは、加西市民としてうれしい限りです。是非、若い世代へのアドバイスやメッセージをお願いします。

竹本 私も加西で育って、東京に出てきて仕事をしていますが、大事なのは自分自身の夢を育むこと、そして、それを実現するのに、いろんな努力を積み重ねていくと必ずやきっかけが現れ、実現できると思います。

市長 小さい頃の加西、それから今の加西を見てどう思われますか？

竹本 小さい頃は、やっぱり身近な自然というか、田んぼあり、川あり、山ありですね。小さい時に近所の友だちと山の中を走ったり、おたまじゃくしを取ったりとかが思い出深いです。ユニークな点は、田園都市、それから歴史と文化、これはすごい財産です。播磨風土記が残っていて、そこに実際出てくる古墳などの史跡があるのですから。風土記というのは、全国で出雲・播磨・肥前・常陸・豊後しか残っていないんです。これからも、そういう自然、文化、歴史を引き継いで残して行ってほしい。そういう場所が残っているということ自体が財産ですから、是非大切にしたいと思います。歴史や文化遺産は自分で作ろうと思っても作れません。また外に出て初めて発見し、外の人の交流があって良さがわかることもありますね。

市長 今、加西は財政的にも大赤字で、働く場所も少なくなると、市民全体が意気消沈しています。しかし、そういう加西を元気にするには、元々持っている素晴らしい資産、あるいは特色、強味をもっと伸ばさなければなりません。一つは農業空間。それと自然環境、景観をもっと伸ばしていけば、加西市民が加西市のすばらしさを再発見して、それで新たな取り組みができると思っています。